

「沖縄の母子世帯」の検討に向けたライフヒストリー法の位置

○平安名萌恵 (立命館大学大学院・学振DC2)、

戦後、家族病理学者を中心とする一部の家族研究者は、母子世帯を「家族病理」と捉えていた。一方で、沖縄の母子世帯については、相互扶助的な親族関係によって支えられているとして特異な存在として捉えた。こうした沖縄の母子世帯に対するパースペクティブは、近年ライフヒストリー法を通して問いなおされつつあるが(例えば平安名 2020)、そうしたアプローチの変化が沖縄の家族理解にどのような/どのように変化をもたらしたかは未だ明確にはなっていない。そこで本報告では、戦後から現在に至るまでの家族病理学・沖縄研究の学説史と方法論の展開を確認するとともに、ライフヒストリー法を用いた沖縄の家族研究の家族社会学領域における位置づけを検討したい。

都市社会学・家族病理学者である大橋薫は、母子世帯を、資本主義社会における家族関係の解体と個人化の象徴的な例の一つとして問題視した。そうした視点を共有したのが家族病理学者の清水信二や畠中宗一であり、病理現象としての母子世帯の解決に向けて、家族臨床による再家族化を目指していた。なかでも、大橋や畠中は、沖縄の母子世帯が親族ネットワークに支えられていると分析しており、沖縄の家族を民主的連帯の基盤であると肯定的に捉える沖縄研究の視点を共有した。構築主義やジェンダーアプローチの台頭により、家族病理というカテゴリー自体の問い直しがなされた一方で、相互扶助的な共同体で生活する「沖縄の母子世帯」の問題は近年まで十分に行われてこなかった。

しかし、近年ではライフヒストリー法、とくに岸政彦(2018)の提示した「他者の合理性の理解」アプローチに基づいた分析が試みられ、沖縄の貧困層におけるジェンダー格差や暴力の再生産構造が詳細に検討されるようになった。ライフヒストリー法は、「沖縄の母子世帯」に対しても、調査対象者の生活実践レベルからの再考を可能にしている。また現在、家族社会学における家族問題を分析対象とする研究は、「なぜ人々は、家族に問題を抱えても彼らとの関係性を維持するのか」という次元に問いの重心を移行させているが、ライフヒストリー法はそうした行為を社会構造と再接続することを通して、課題を前に進めることができる。

参考文献: 平安名萌恵, 2020, 『「沖縄の非婚シングルマザー像」を問い直す』『フォーラム現代社会学』19: 19-32.
岸政彦, 2018, 『マンゴーと手榴弾』勁草書房.

キーワード: 沖縄 ライフヒストリー 家族問題